

◇ よりよい自分をつくっていくために（資料編） 「こんな授業にしたい」の活用にあたって

平成 25 年 3 月発行の「よりよい自分をつくっていくためにⅢ」では、「学びの実感」を積み重ねることを通して、主体的な学びの姿勢を育むとともに、どの子どもにも「確かな学力」を育むことを全体イメージとして示しました。そして、柱となる「子どもの学びを支える教師の役割」「教師の授業づくりを支える学校体制」について示すとともに、子どもの学びを支える教師の役割によって、学びを実感している子どもの姿を、事例を通して紹介しました。

続く「よりよい自分をつくっていくためにⅣ」（平成 27 年 3 月発行）では、「教師の授業づくりを支える学校体制」について示すとともに、全ての教師の土台となる「大切にしたい授業づくりの基本要素」を示しました。「教師の授業づくりを支える学校体制」では、各校の同僚性や協働性の高まりを期待し、校内研修等の事例を掲載しています。また、「大切にしたい授業づくりの基本要素」では、事例やコラムを交えて、観（子ども観、教育観等）や学習指導の基本技術（板書、発問等）について示しています。

今回、「よりよい自分をつくっていくためにⅢ・Ⅳ」の資料として「こんな授業にしたい」を作成しました。本資料は、各種研修会や学校訪問等から見えてきた各教科等における授業づくりのよさや課題を踏まえ、先生方に意識してほしいポイントをまとめたものです。また、経験の少ない若手教師が増えている本県の現状を鑑み、できるだけ各教科等の言葉で、分かりやすく、かつ具体的に表記しました。

先生方におかれましては、互いに授業について語り合ったり、単元を構想したりする際に、「よりよい自分をつくっていくためにⅢ・Ⅳ」の冊子とともに、本資料を活用していただければ幸いです。本資料を活用することで、これまで以上に各学校で「子どもについて」「授業について」、教師が語り合う姿が生まれることを期待しています。

目指したい授業をキーワードで示しました。

小学校 国語

学びの実感を積み重ねるために

『日常生活に生きて働く国語の力が付く』授業

国語科では、子どもが「説明文の読み方が分かった」「新聞でまとめる方法は他の教科でも使えそうだ」「他の本でも〇〇〇に注目して読んでみたい」といった思いを持つことができる授業を目指したいものです。そのためには、教材文の内容理解に終始するのではなく、別の文章を読んだときに活用できる力が付く授業を構想することが大切です。授業の中で「話す力・聞く力」「書く力」「読む力」を身に付け、異なる場面、単元等において、螺旋的(らせん状)・反復的に身に付けたものを使い、各教科等の学習や日常生活でも繰り返し活用することで、国語の力を確かなものにしていきます。

ポイント 1

領域・指導事項を絞り、目標を設定する

「国語って何を学んだのか分からない」という子どもの声を聞いたことはありませんか。この単元でどのような力を付けるのかははっきりさせるために、領域・指導事項を絞り、目標を設定することが大切です。その単元で指導するものを「A話すこと・聞くこと」「B書くこと」「C読むこと」から、基本的に1単元1領域で設定します。子どもの実感を踏まえて目標を設定することで、子どもが身に付けた力を実感できるようになります。「自分の言葉で説明できた」「〇〇〇の考えに納得した」という声を聞くことができるようにしていきましょう。なお、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」は、各領域の指導を通して指導するため、単元の目標は「国語への関心・意欲・態度」「領域の指導事項」と併せて3点セットで設定するようにしましょう。

ポイント 2

学んだことが活用できる言語活動を設定する

○子どもが見通しと目的を持ち、主体的に学ぶことができるようにするために、学んだことが活用できる言語活動を設定します。相手や目的、意図などをはっきりさせながら、何のために、どのように言葉を用いればよいのかを子どもが実感できるようにします。そうすることで、国語の力が身に付き、各教科等の学習や日常生活に生かすことができます。
○教師が事前にその言語活動を試行すると、子どもに力が付く活動であるか、子どもの実態に合っているかを確かめることができます。



ポイント 3

目標に合わせて評価し、子ども自身が確かめる

○どのような資質や能力を、いつ、どの場面で、どのような方法で評価するのかを明確にし、目標に対応する形で、「国語への関心・意欲・態度」「話す・聞く能力」「書く能力」「読む能力」「言語についての知識・理解・技能」を評価します。
○子ども自身ができるようになったこと、各教科等の学習や日常生活の中で使える国語の力が身に付いたと実感することが「国語が好き」のきっかけになります。

実践事例(小学校5年生)

単元名 “私の一冊”の登場人物の心情が伝わる朗読をしよう
～登場人物の相互関係や心情、場面についての描写を捉える～
教材文「大造じいさんとガン」

単元日標

- ・ 登場人物の心情が伝わるように、工夫して朗読しようとする。(国語への関心・意欲・態度)
- ・ 文章を朗読するために、登場人物の行動や会話、場面についての描写を捉え、内面に描かれた心情を想像する。(読むことエ)
- ・ 比喩や反復などの表現の工夫に気付くことができる。(伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項イ(ウ))

本時の目標 (4・5/8時)

「大造じいさんとガン」の朗読を通して、登場人物の心情を想像することができる。(読むことエ)

学習活動

- 本時のめあてを確認する。
大造じいさんの心情が表れる朗読をしよう。
- 朗読の仕方とそう読む理由を朗読シートに書き込む。
『バシッ。快い羽音一番、一直線に空へ飛び上がりました。らんまんときいたスモモの花が、その羽にふれて、雪のように清らかに、はらはらと散りました。「おうい、ガンの英雄よ。おまえみたいなえらぶつを、おれは、ひきょうなやり方でやっつけたかあないぞ。…」』は、明るく声で歯切れよく読む。春になり、残雪が元通り飛べるようになったことを大造じいさんが喜び、正々堂々と戦おうというすっきりした気持ちだから。会話のところは大きな声で呼びかけるように読む。残雪を英雄として認めたから。
- 朗読と書き込みを交互に行う。
声に出してみたら、会話のところはゆっくり読む方がいいと思った。尊敬する気持ちも表すようにする。「バシッ」から「散りました」までは少し速く読んで変化を付けよう。
- 大造じいさんのどのような心情を想像して、どのように読むことを考えたかノートにまとめてみよう。(振り返り)

○〇のところは、明るくゆっくり読む。理由は、大造じいさんが残雪を英雄と認め、次は正々堂々と戦おうと思ったから。何かすっきりした気持ちで次の戦いを楽しみにしている感じ。

本時で身に付けた力を振り返ります。

第三次は、自分が選んだ一冊を朗読し、第二次で身に付けた力を活用します。

単元名は設定した言語活動が分かるようにします。～〇〇～に指導事項を入れます。

学習指導要領解説の該当箇所の記号を明記し、目標を控ええます。

第二次は教科書の共通の教材「大造じいさんとガン」で朗読の工夫の工夫を考えます。

朗読シートの書き込みで評価します。

単元の流れ

- 【第一次】
1 教師の朗読を聞く。学習計画を立て、見通しを持つ。“私の一冊”を選び、読み進める。
- 【第二次】
2・3 教科書の教材文のあらすじ・登場人物・情景描写の工夫を確認する。
4・5
朗読の仕方とそう読む理由を考える。
6 朗読を聞き合う。
- 【第三次】
7 “私の一冊”(選んだ本)も同様に読み、朗読の仕方とそう読む理由を考える。
8 “私の一冊”の朗読を聞き合う。

特に配慮したいことや確認したいことを黄色の吹き出しで示しました。

左のポイントを意識したときの授業展開の例として示しました。

キーワードで示された目指したい授業を分かりやすく説明するために、各教科等における子どもの具体的な姿を示しました。

授業づくりをするときに大切にしたいことはたくさんありますが、本県の現状を踏まえ、各教科等において特に意識したいことをポイントとして示しました。